

佐渡には三十をこえる能舞台がある。これは国内に現存する能舞台の三分の一にあたる。

「鶯や十戸の村の

能舞台」(大町桂月)

私の暮らす十数軒の村にも、茅葺屋根の小さな能舞台が杉木立の静寂の中に立つ。

なぜこの島で、能楽は盛んになったのだろう。室町期に能の創始者・世阿弥がここに流された歴史がある。しかし島民の間に広まったきっかけは、江戸時代初頭、大久保長安という人物が奨励したことによる。

この人は甲斐や石見で鉦山の経営に辣腕をふるい、認められて初代佐渡奉行(代官との説もある)として赴任した。鉦山技術や都市計画のエキスパートである彼は、その一方で猿樂の太夫を父に持つ能楽師でもあった。最先端の技術と芸能。奇妙に見える取り合わせではある。しかしこれは偶然ではなかった。そう私には思われる。

佐渡金山(相川鉦山)の開発は長安の指揮のもと、島の一角に突如人口5万の鉦山都市を出現させた。そこに物資を供給するため、島内の津々浦々に急速に貨

幣経済がもたらされた。山の木、海の魚がお金になる。自給のための作業が収入のための労働になる。その変化を島民は勇んで受け入れ、しかしまた、得も知れぬ不安を内面に抱え込んだのではないか。

金山と能

人間のための合理へ その3

十文字 修

(じゅうもんじ おさむ)

新潟県佐渡島在住

暮らしと仕事、全体と個、自然と人間。一体であったそれらがバラバラに解体されてゆく。家や村のなりわしも変化する。お金のやりとりという光がもたらす影のような不安感が、この島の人びとの心を浸したに違いない。その漠たる不安を癒すための技法として、迎え入れられたのが能楽だった。私はそのように考える。

型に沿ってゆっくりと動く能の所作は、密度濃い集

中に充ちている。それに接する時、私は初期仏教の歩く瞑想を連想する。能の所作を動く座禅とする見方もある。(『仕舞入門講座』野村四郎)

私の拙い理解ではあるが、それらは日常の目まぐるしい思考の渦から心と体をひきもどし、しずめ、正気を保つための智慧だと思う。生と死をふくめた存在の全体性を回復するための技法である。

大久保長安は、旧来の村々の暮らしを文明の端緒へ引き入れ、同時に文明がもたらす病の治療法ももたらした。彼はある種の天才だったのかもしれない。だから徳川家康にこのうえなく重用され、長安死後、その一族はおなじ家康によって根絶やしにされた。

さて、それから四百年が経った。かつてとは比較にならない巨大なマネーの世界、猖獗を極めるグローバル資本主義の渦中において、私たちは自分の心をずいぶん無防備に晒している。正気を保つ芸が要る。

